

クラブ活動の運営についての一考察

自主性・社会性を養うクラブ活動をめざして

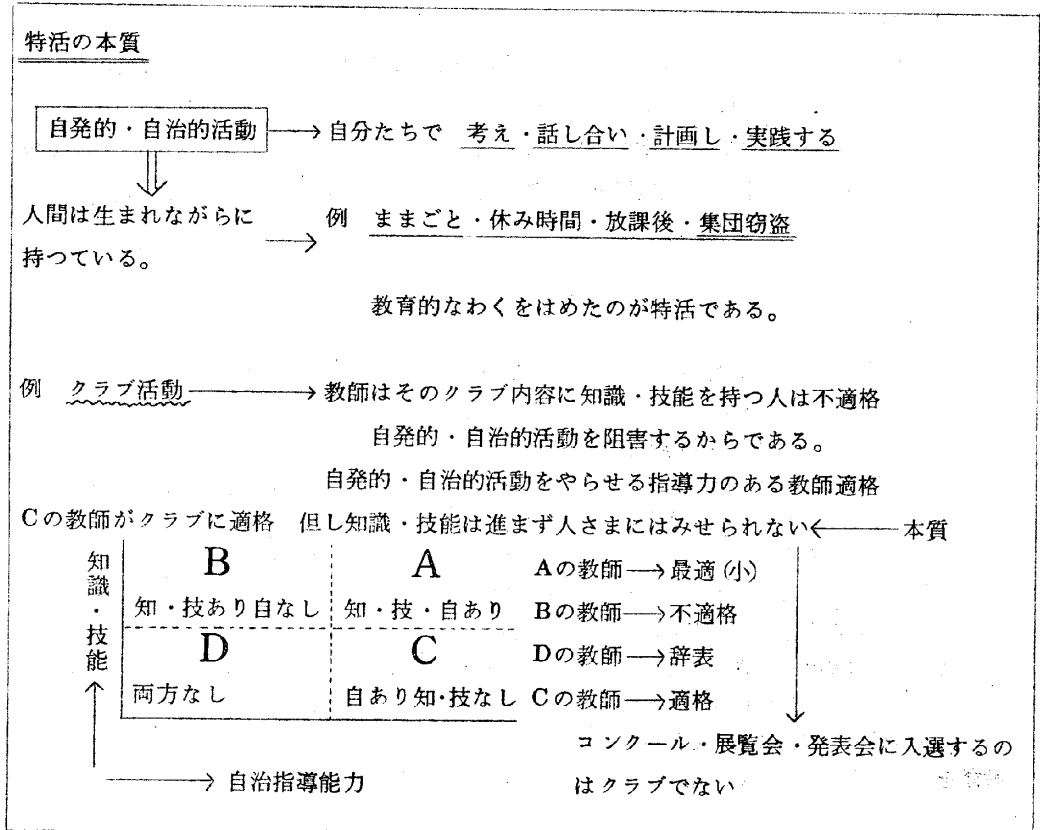
足利市立柳原小学校教諭 小 高 良 夫

I はじめに

昭和43年2月18日 宇都宮の栃木会館で、「特別活動の指導と今後のあり方」という演題で、文部省教科調査官青木孝頼先生の講演があった。

その時、青木先生は「自発的・自治的活動が特活の変らぬ本質である」ということから、その例としてクラブ活動をあげられた。講演の内容を整理すると、つぎのようになるとおもう。

「特別活動の指導と今後のあり方」 昭和43年2月18日於栃木会館
 文部省初等中等教育局教育課教科調査官 青木孝頼先生



クラブ活動の具体的なねらい

昭和44年5月 文部省「小学校指導書特別活動編」

ひとりひとりの児童が自己の生活を楽しく豊かなものにしようという意図のもとに、同好の児童の集団において、共通の興味関心を追求する活動を自発的・自治的に行なうことによつて、自主性・社会性を養い、個性の伸長を図る。

結局、青木先生の言われるクラブ活動とは、指導教師の面からみると、自発的・自治的活動を育成する指導力のある教師が担当すべきである。即ち、「自分たちで考え、話し合い、計画し、実践する」といつた特活の本質をふまえての指導が必要である。自発的・自治的活動とは、児童たちにその力がつくまで、教師が肩がわりするということでは、決して育つものではない。別のみかたをすると、具体的にはクラブで教師は、知識・技能のみを指導していたのでは、自発的・自治的態度は育てることは不可能であると言われていたとおもう。

ところで、43年度までの本校のクラブ活動を指導面からみてみると、それぞれの担当教師が汗を流しながら熱心に児童の手をとり、むしろ普通の教科より担当しているものが得意なためか、熱をこめて指導していたのが実情であり、またそうしたことが、すぐれたクラブの指導者であるという評価であった。

それらを係りとしてみるにつけ、果してこれがクラブ活動の本質であるのか、これでは普通の授業とどこに変わるものがあるのか、変わらぬとすればクラブなるものが、普通の教科から独立していなければならぬ理由があるのだろうか。これで自発的・自治的態度が育つか、これにより自主性・社会性が養われ個性の伸長が得られるのか、といった疑問が常にあったわけである。そんな時、青木先生の講演をうかがい、これがクラブ活動における教師の立場かという強い印象、そして目がさめるような感じを受けたわけである。

そこで、本校のクラブ活動も来年度より、この方向で進めていこうと考えたわけである。しかしそれには、具体的に先生方が自分の不得意なクラブを担当するというところで、当然反対が予想されるし、教師の頭の切りかえが最大の難関と考えたので、さっそく改善のための準備にとりかかったわけである。

II 改善のための準備およびその手順

改善の手はじめに、前記の青木先生の講演内容をプリントし全職員に説明し、来年度より本校もその方針でクラブ活動を実施しようかと係りとして考えていると、意見をのべておいた。その時の反応は、「それはおもしろい試みだ」というのが一般的な反応であった。

つぎに2月末に、43年度のクラブ活動の反省資料の一つとして、クラブを実施していた5・6年児童を対象に、つぎのようなクラブアンケートをとった。

クラブアンケート

(自分の考えにちかいもの1つに○じるし)

- ① わたしは $\left\{ \begin{array}{l} 5\text{年生で} \\ 6\text{年生} \end{array} \right. \left\{ \begin{array}{l} \text{男です。} \\ \text{女} \end{array} \right.$

そして、クラブは クラブ です。

- ② クラブの時間がくるのが $\left\{ \begin{array}{l} \text{まちどおしい} \\ \text{ふつう} \\ \text{いやだ} \end{array} \right.$

そしてそのわけは、(かんたんに書いてください。)

.....

.....

.....

- ③ あなたのクラブでは、クラブでなにをするか(勉強・研究の計画など)

クラブ員で話し合つてきめた
 について 先生がおしえてくれたとおもう。

- ④ あなたのクラブでは、むずかしいこと・わからないことについては

たいがい先生がおしえてくれた
 たいがい自分たちでかいけつしたとおもう

- ⑤ クラブについて、希望があれば書いてください。

.....

.....

.....

このアンケートの目的は

- ① クラブに喜んで参加しているか。
 ② 教師と、児童のどちらに、計画や問題解決の主動権があるか。

の2つのことを知る目的でおこなつたわけである。

これについて、その結果をまとめて全職員に報告した。その大要はつぎのとおりである。

本校クラブ活動の実態

(昭和43年2月27日5・6年全員のアンケート結果 5年182名 6年175名)

- ① クラブがくるのが

	5年	6年
まちどおしい	111名	108名
ふつう	61	63
いやだ	4	2

- ② クラブの計画

	5年	6年
クラブ員	81名	68名
教師	101	107

③ 問題解決

	5年	6年
クラブ員	66名	53名
教師	109	129

以上の結果

① クラブ活動には、児童の多くは喜んで参加している。

② 計画や問題解決の主動権は、教師にある。

ということになり、②については、クラブ活動の本質からはずれているのではないかと考えられた。かような反省にもとづき、3月初旬に「来年度からのクラブ改正」として職員会を持った。その時の資料が、つぎの「クラブ活動改正案」である。

クラブ活動改正案 昭和43年3月 職員会提案

現 行	44年度案
<p>参加学年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5・6年生全員 約360名 <p>期 間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5～11月 各月3回 <p>実施時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回 1.5校時 ・年間 2.5校時 <p>クラブ数およびクラブ名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・14クラブ(1クラブ平均2.3名) ・読書・理化・生物・合唱・合奏 ・絵画・工作・手芸・競技・体操 ・卓球・リズム・サッカー・やきもの <p>職員組織</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原則として1クラブ2名 ・部長を除外した31名 ・比較的得意なクラブを担当 	<ul style="list-style-type: none"> ・4・5・6年生全員 約540名 <p>・年間 各週1回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回 1校時 ・年間 3.5校時 <ul style="list-style-type: none"> ・23クラブ(1クラブ平均2.3名) ・読書・理化・生物・合唱・絵画 ・工作・手芸・卓球・作文・郷土 ・版画・調理・やきもの・陸上水上 ・器械体操・ダンス・サッカー・ラジオ ・オルガン・笛・ハーモニカ・いけ花 ・ソフトボール <ul style="list-style-type: none"> ・原則として1クラブ1名 ・部長も含め33名 ・比較的不得意なクラブを担当 <p>(知識・技能・技術面の指導はできないが、それについてセンスをお持ちの先生</p>

本人の申し出による)

○ 指導根本理念

- ・知識・技能・技術面の指導が中心になりがち

- ・自分たちで解決していくように指導

○ クラブを原案どおりに改正した場合の問題点

- ・ 1クラブに教師が原則として1名となる。
- ・ クラブ数増加からくる予算不足
- ・ 4年生の週時間数の増加
- ・ 音楽・体育関係など、対外行事にクラブとしての参加は不可能に近い。

参加する場合→課外活動(クラブと別組織)→児童・教師の負担加重

- ・ 先生方の頭のきりかえ→1番困難とおもわれる

ここで強調した点は、当然のことながら児童にクラブの計画・問題解決等の主動権を移す。そしてその手段として、具体的には不得意なクラブを、教師が担当するということである。そしてこれに対して予想される問題点的もあげて職員会にかけた。今度は、改正点が具体的に示されていたので、先生方も真剣になり、反対も相当なものであった。反対意見の代表的なものは、「考え方は結構であり賛成である。しかし、これは理想論であり本校の実態にあわない。」というものであったが、結局原案を一部修正してやってみようという結論が出された。

ついで児童からも5・6年児童を対象に来年度のクラブ組織・運営について希望をとった。続いて3月末に、職員・児童の希望および設備状態を考え合わせ、下記の「44年度クラブの組織と運営」のような方針を立て、再度職員会の了承を得たわけである。

III 44年度クラブの組織と運営

44年度クラブの組織と運営

- 参加学年 5・6年生全員 約360名
- 期 間 年間を通じて毎週1回
- 実施時間 1回1.5校時(5月28日より50分と変更になる)
- クラブ名およびクラブ数
 - ・読書 ・習字 ・演劇 ・郷土 ・生物 ・絵画工作 ・版画 ・もけい ・やきもの
 - ・調理 ・器楽 ・競技 ・卓球 ・裁縫ししゅうあみ物 ・サッカー ・ソフトボール
 - ・バレーボール 以上 17クラブ
- 職員組織
 - ・来年度(44年度)の特活の基本的方針に従い、知識・技能的に優れた方はそのクラブを担当しない。しかし過渡期でもあるので、特に不得意なものを除いて組織をつくる。

得意・特に不得意のものは、本人の申し出（得意なもの2つ、特に不得意なもの2つ）による。

- ・運動関係クラブは、卓球・バレーボールクラブを除き事故なども考えられるので、できるだけ男の教師を1名入れる。
 - ・家庭科関係のクラブには女の教師を1名入れる。但し調理クラブは男の教師のみで担当する。
 - ・原則として児童数20名をこえた場合は、2名の職員を配置する。
 - ・クラブ係の教師はクラブを担当せず、活動当日担当職員が欠けた時そのクラブを補助する。
- その他開始・終了時刻を知らせ、活動中は各クラブを巡回してその活動状況を記録する。

以上のような方針のもと、44年度に入り、新5・6年児童全員から「クラブ希望調査」および教師の得意・不得意の調査をし、教師にあつては、それをもとにクラブの係りが担当を割当てて、44年度から本校としては、改正された新しい考えのもとにクラブ活動が開始されたわけである。

かようにして、第1学期終了までその活動も9回を経過したところで、児童と今度は教師も加えてアンケートをとった。児童のは、前記の43年度に実施した「クラブアンケート」と全く同じもので、前年度との比較ができるように考慮し、教師のも児童と立場をかえただけでほぼ同じものである。

まず児童の方から、その結果をみると、つぎのようになった。

本校のクラブ活動の児童の意識調査

	43年度5年(現6年生) 43.2.27調 182名	44年度6年(前年の5年) 44.7.18調 185名	44年度5年生 44.7.18調 183名
① クラブのくるのが			
ま ち ど お し い	60 %	65 %	70 %
ふ つ う	30 %	27 %	27 %
い や だ	7 %	8 %	3 %
② クラブの計画			
ク ラ ブ 員 が	40 %	82 %	87 %
教 師 が	60 %	18 %	13 %
③ 問題解決			
ク ラ ブ 員 が	35 %	64 %	61 %
教 師 が	65 %	36 %	39 %

アンケートの結果にみられるように、①のクラブ活動がくるのがどうかという場合をみると、わずかに待ち遠しいが、43年度5年生現6年生の同じ児童をみると、5%ほど多くなっているがほぼ変化なしと考えられる。つぎに②③の計画・問題解決の主動権は、明らかに昨年度と逆転し教師から児童の手に移ったことが、児童の意識の中にもでていたことが示されていた。しかし、①のクラブのくる

のいやだと反応した児童たちのその理由に、昨年度まで全くみられなかつた新しい傾向がみられた。そのいやな理由の例として、器楽クラブ（いやだと反応した児童が多くみられた）をみると、

- ① 先生が指導してくれない。
- ② 技術があまり進まない。
- ③ 先生がたよりにならない。

といった教師不信の声が、わずかな児童であるがあがっており、それが器楽クラブといった技能面のクラブに、集中しているのが特徴であった。これは現在の6年生のみにみられた現象で、たぶん昨年5年の時、器楽クラブで言えば教師の強力な指導のもと、自分でも満足のいくような知識・技能の進歩が得られた。そこで今年度も同じクラブに入ったら、どうも勝手が違うということ、それに、教師の児童に対する本校としては新しい考え方のクラブ活動に対する心構えの説明不足からきたものとおもわれる。

いずれにしても、「喜んで楽しく参加できるクラブ活動」を以前から目指す本校としては、問題点であった。しかし、先生がたよりにならないから、これからは自分たちの力でやっけて行こうという自発的・自治的活動の芽ええが感じられたことは、予想していたとはいえ計画した係りとしては、大変うれしいものであった。

ついで、問題となつた器楽クラブの6年生に対しては、本校としての新しい考え方を再度説明し、自分たちの力でぐんぐん伸びるだけやるのだと、2学期の当初全員が納得のいくまで時間をかけて説明した。その結果として、20回目のクラブ終了の35年2月4日に、再び同じアンケートを器楽クラブ員（6年生のみ）に実施してみた。

器楽クラブ（6年）の児童意識調査

45年2月4日調査 調査人員20名

① クラブがくるのが		② クラブの計画	
ま ち ど お し い	85%	ク ラ ブ 員 が	90%
ふ つ う	15%	教 師 が	10%
い や だ	0%		
③ 問題解決			
ク ラ ブ 員 が	95%		
教 師 が	5%		

以上の結果から、PRさえ十分行なえば、児童たちは以前にもまして喜んで立派にやっけていけることがわかり、その手続きが面倒でも十分行なう必要性を強く感じた。

本校のクラブ活動の教師意識調査

昭和44年7月18日調べ クラブ担当33名

クラブアンケート（近いもの1つに○）

- ① 今年のクラブ名 。 昨年の担当クラブ 。
- ② 現在の担当が決まった時 { 満足だった。 } { 満足。 }
 { 特別どうということはない。現在では } { 特別どうということない。 }
 { ショック（不満足）だった。 } { 不満足。 }
- ③ あなたの担当クラブでは、クラブの実施計画（研修画）は { クラブ員の話し合いで決めている。 }
 { 教師の指導助言による。 }
- ④ あなたの担当クラブでは、児童たちの力では解決できそうにない問題（児童から質問された時）にぶつかった時 { たいがい児童たちで解決するように仕向けた }
 { そのままにしておいた。 }
 { たいがい教師が解決（答えて）した。 }
- ⑤ クラブについて希望があれば書いてください。

○アンケート集計結果

① 担当が決まった時		現在では	② クラブの計画	
満足	0%	20%	クラブ員に	80%
ふつう	76%	76%	教師が	20%
ショック（不満足）	24%	4%		
② 問題解決				
クラブ員に	88%			
そのまま	0%			
教師が	12%			

この質問内容は、前記のとおり、立場を変えたのみで児童のものとはほぼ同一であり、児童と対比できるようにしたわけである。

②③をみると、教師と児童との間に、同じ発問であっても、それぞれ意識の上で多少のずれがみられる。例えば問題解決の場合、教師は児童たちで解決できるようヒントを与えるなどして、自分たちで解決するように仕向けたと意識している教師が88%いるのに、それを受けとめる児童は、6年生で64%であるといったことである。しかし、まず態勢としては、教師も児童もその傾向は一致しているとみられる。

いずれにしても、本年度の中心的ねらいである、児童の手に主動権を移すということは、ほぼ満足のいく結果が得られたわけである。もちろんこれによって、自発的・自治的能力が育成されたとは一概に言えることではないが、少なくとも43年度までの本校のクラブ活動にみられなかった、新しい方向に向っていることだけは確かなことだと考えられる。

つぎに実際のクラブ活動状況を記録したものが、後記にみられるものである。これは、クラブ係の教師がクラブ活動中に、各クラブを回って、活動状況を記録したものの大要である。ここにみられるように、雨天の際および冬期の運動関係クラブの一部に問題点が残るが、態勢としては良好である。特に今年度新設されたクラブほどその結果がよい。これは、児童の希望と期待で一ばいなこと、そして今までの伝統のない新設クラブだけに、新しい試みに、素直にとけこめたのではないかとおもう。

活動巡回記録の大要

(クラブ係教師の記録)

- | | | |
|-----|-------|--|
| 第1時 | 4月中旬 | ・クラブ希望調査 |
| 第2時 | 4月30日 | ・5・6年とも時刻までに全員各自の教室を出ていた。
・各クラブとも理想的、クラブ長選出までは教師が、その後はクラブ長を中心に計画していた。特に新設クラブ活発。 |
| 第3時 | 5月7日 | ・ソフトクラブ、サッカークラブは開始時刻前から用意しており、児童の活動としては望ましい。 |
| 第4時 | 5月28日 | ・本日よりクラブ実施時間が1回50分となる。
・クラブ予算決定 |
| 第5時 | 6月11日 | ・各クラブとも順調に活動 |
| 第6時 | 6月25日 | ・時間短縮になったので、特に調理クラブは大変と思ったが、クラブ員の相談により、1週おきに実習、あと1週のクラブには前回の反省および次回の計画、そして調理するものも「みつ豆」など比較的短時間でできるものを選んでいった。時間がなければいよくふうするものだ。 |
| 第7時 | 7月2日 | ・初めての雨天、運動関係クラブは室内で計画、今までの反省をしていた。 |
| 第8時 | 7月9日 | ・雨天、運動関係クラブは2週雨天が続くと大変。 |
| 第9時 | 7月16日 | ・各クラブとも、第1学期活動の反省および来学期の計画等クラブ長を中心に相談していた。 |

途中略

- | | | |
|------|--------|-----------------------------------|
| 第15時 | 10月29日 | ・風強し、バレークラブ困難。 |
| 第16時 | 11月12日 | ・社会科研究会のため教師6人欠。どのクラブも先生なしで順調に進行。 |

以下略

IV ま と め

終りにまとめとして、本校では現在までのものより、よりよい方向と思われる青木先生の考え方を基本として、それを忠実に実施してみたということにとどまるわけであるが、青木先生の言われた「自発的・自治的活動が特活の本質であり、それには児童にその力がつくまで、教師が肩がわりしてや

るということでは、決してその能力はつかない。そのためには、クラブ活動についてみると、教師の指導の面から、自発的・自治的活動をうながす指導、具体的には児童たちに問題解決や計画について、直接技術や知識を指導するのでなく、そのための方向づけの指導のできる教師。そしてその方法としては、そのクラブの内容について、知識や技能の不得意な教師の方が、知識・技能を結果的には十分指導できないのでむしろ適当である。」ということは、現在までこのような方向で実施してみて、本校の児童の反応などをみる時、間違いではないと言えるとおもう。

しかし、前記のように、果してこのような方向で自発的・自治的態度が育成され、自主性・社会性が養われ、個性の伸長が得られたかということは、現在の段階では、時間不足もあり一概に言うことはできない。しかし、その方向に向っているということだけは言えるとおもう。

なお教師の面からみると、知識・技能を指導しなくともよいのだから、「今までより楽だ。」という考えは間違いである。そしてそのような態度でのぞんでいる教師の担当するクラブに、その他の条件も加わったこととおもうが、「クラブ活動はいやだ。」と答える児童が多く出てくる可能性も十分考えられる。いずれにしても、当然のことながら、教師は何もしないのではなく、児童たちの計画・問題解決にあたって、ヒントを与えたり、参考資料を用意させたりするわけで、知識・技能指導中心の以前よりむしろかしい立場に立っているのではないかと考えている。このようにしてクラブ活動も回を重ねて行けば、前記の「第16時 11月12日」のクラブのように、時には教師がいなくとも、児童たちは自分たちの計画に従って、とまどうことなくクラブ活動が出来ることも実証されたわけである。

終りに、このようにクラブ活動を改善して行くための最大の難関は、教師の頭の切り替えと、児童（特に本校で言えば、昨年度までのクラブを経験している6年生）に対する説明であるとおもう。しかし、これとても時間と資料を整えて、計画的に行なえば解決できる問題であるとおもう。

評

クラブ活動は学年・学級のわくを越えた同好の児童が共通な興味や関心を追求する過程で、自発的・自治的活動を体験させることによって自主性・社会性を養い、個性の伸長を図ることをねらいとしている。だからクラブ活動をとかく知識や技能を指導する場のように考えていた教師の姿勢に改善が必要となるわけで、児童自身が自分で考え、話し合い、計画し、実践するという活動過程に焦点をあわせなければならない。

とかくマンネリ化しがちな現状で、一つの研究会や講演会を契機として、現状にメスを入れ、ねらいを再確認し、ただちに改善にとりくむ、そういう教師の実践力にはおおいに敬意をひょうすとともに見習わなければならない。この実践力こそ、児童の自発的・自治的な実践力を培う原動力となるであろう。